坂田寺出土地鎮具

坂田寺の第５次調査で検出された土坑SK160は、８世紀後半に建立された伽藍中枢の建物SB150の北東に位置し、後世に削平された８世紀後半の基壇建物の地鎮遺構と推定されます。SK160からは、土師器（はじき）・須恵器（すえき）等の土器類の他、佐波理鋺（さはりわん）、銅銭、銅鈴、金箔等の金属製品、琥珀玉・ガラス玉等の玉類が出土しました。

出土した銅銭は全部で291点であり、和同開珎、萬年通寶、神功開寶の３種に加えて、唐の開元通寶１点があります。いくつかの銭貨に植物の可能性がある繊維痕跡が残存しており、一部で撚りの痕跡を観察しました。発掘時には銭貨がいくつかのまとまりで土坑内に散在しており、もとは紐で通した緡銭（さしぜに）の状態で埋納されていた箇所があったと考えられます。また、平織りの組織が付着した銭貨もあることから、これら銭貨が布で包装されていた可能性もあり、緡銭以外の埋納形態も想定することができます。

土器類はいずれも小型品で、写真の須恵器は平瓶と呼ばれる器種です。外表面に自然釉がみられ、かたちや製作技法等から、猿投窯（さなげよう）（現在の愛知県）の製品ではないかと考えられます。

奈良時代前期に唐からもたらされた『陀羅尼集経（だらにじっきょう）』には、仏堂建立にあたり、基壇内に七宝（金・銀・真珠・珊瑚・琥珀・水晶・瑠璃）と五穀（大麦・小麦・稲穀・小豆・胡麻）を埋納する作法が記されています。SK160からも、金箔、琥珀、ガラス玉が出土しており、本遺構の地鎮め供養もこれに基づいている可能性があるでしょう。

（都城発掘調査部　木村 理恵）

写真は平瓶・銅銭ともほぼ実物大です。